



TITLE:

静脩 Vol. 10 No. 1 (1973.11) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 10 No. 1 (1973.11) [全文]. 静脩 1973, 10(1)

ISSUE DATE:

1973-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65949>

RIGHT:

## 河上肇の「政治学講義」ノートについて

高 橋 俊 哉

河上文庫の全体的な内容については、さきにこの紙面をおかりしてご紹介したことがある。ノートや切抜きなどをのぞいて、書籍類の整理をすべておえた現在、文庫の個々の内容についてご報告したいこともあるのだが、ここでは河上博士の著述と考えられる一冊のノートについて書いて責をふせぎたい。

問題のノートはハツ折版の大学ノート約800ページ分を一冊に製本したもので——したがってその外観はノートというよりは一冊の著作そのものである——黒のクロスを用い、背表紙に「政治学講義 従明治42年9月至明治44年5月」の活字が金箔で押されている。明治44の数字が削り落とされているように見えるのは、あとでふれるように43の誤りのためであろう。本文は黒インクを用いたペン字の横書きである。（筆跡が河上のものであることは、ほぼ間違いない）河上博士の多くのノートに見られるように右側のページにだけ文章がつづられ、左ページを空白のまま残しているのは、後日の加筆・補註に便ならしめようとしたためと推測される。欄外の加筆はかなり多く（一部製本のさいカットされているが、判読が不可能というほどではない）、右ページの本文の大半が大きな訂正を加えられて、左ページに書き移されていることもしばしばである。ページ付けの数字は4つの章ごとにべつべつに与えられているのだが、これを合計すると約320ページになる。なお、章と章とのあいだには、20ページから30ページほどの空白のページがそれぞれ置かれている。ノート本文の構成を紹介しよう——

第1章 政治学ノ本質（84ページ）

第2章 国家ノ分類（95ページ）

第3章 政治思想ノ変遷（上）（119ページ）

第4章 政治思想ノ変遷（下）

第1節 無政府主義（55ページ）

このノートが河上肇の著述であろうと推測するのは、第2章「国家ノ分類」の6ページ目に「国家ノ最モ幼稚ナル形態」としての氏族国家および氏族の最小単位としての家族に言及しながら、「普通行ハレテ居ル説ニ依ルト、最モ幼稚ナル時代ノ人類ハ、男女ノ間ニハ結婚ト云フ如キ一定ノ関係ハ成立シテ居ラナカッタノデアッテ、即チ、凡テ Promiskuität（乱

婚)ノ状態ヲ呈シ、從テ家族ト云フ 團結サヘ 作ッテ 居ナカッタノdeal, ト云フノdealガ、此ノ事ノ誤謬dealト云フ事ハ、余ガ『人類原始ノ生活』中ニ詳論シテ置イタ処deal」と述べている一節があることによる。この『人類原始ノ生活』とは、明治42年5月有斐閣より京都法学会「法律学経済学研究叢書 第2冊」として刊行されたものをさすのである。「人類原始ノ生活」の下篇(82—141ページ)は第5章「人類原始ノ社会団体」、第6章「人類原始ノ男女関係」の2章からなるのだが、両章とも上記のテーマ(原始人類の結婚——家族テーマ)を展開したものであって、ノートの記述と内容的に完全に合致する。では、なぜ河上博士はこの時期に、量的にもかなり 龐大なこのようなノートを作成したのであろうか。河上博士はすでに明治41年9月法科大学講師を委嘱されて、東京から京都へ移住している。42年5月、「人類原始…」出版、同7月助教授に任ぜられる。ところで、「京都法学会雑誌」は第5巻第8号(43年8月発行)において43年6月実施された学年末試験の記事をかけた、河上助教授担当の「政治学」の試験問題を次のように報じている——

1. 政治現象ノ本質
2. 政治ト宗教ト経済トノ関係
3. 無政府主義ノ意義及ヒ之カ取締

この試験問題と「政治学講義」ノートの内容を対比していくと、試験問題の第1問は「ノート」の第1章に、第2問は第2章の前半(ここで河上は国家を1)氏族的国家、2)宗教的国家、3)経済的国家に分けて詳述している。なお、この章の後半は君主国家、専制国家等をあつかう)に、そして第3問は第4章にそれぞれ対応・符合していることがわかる。(試みに次年度にあたる明治43年の試験問題を調べてみると、政治学は外国留学からもどった井上教授(井上の留学は42年6月から43年6月までであった)が出題しており、河上博士は経済史の担当に変わっている)。これらのことによって、河上博士が京大赴任1年後の明治42年9月から、43年5月までの間、法科大学で政治学を講じたこと、および、問題の「政治学講義」ノートがその際使用されたものであることは、ほぼ間違いないと思われる。

河上博士は京大赴任の前後のことがらを、いくつかの短文(とくに「思い出・断片」)のなかの「教師としての自画像」、「大死一番」など)に書き残しているが、このノートの執筆の理由や経緯については全くふれるところがない。教官の新任、担当講座の変更、留学などをつたえる京都法学会雑誌の「雑報」欄、その他からも、この間の事情はうかがえない(理由らしいものは推測できるけれども)。しかし、重要なことはノート執筆の経緯などよりは、この著述が河上肇の龐大な著作の中で、どのような位置をしめるか、であろう。このようなことは、もとより専門の識者の判定にまつべきことであろうが、そのための手がかりのようなものは提供できるのではなからうか。例えば、「ノート」の冒頭において、小野塚喜平次の政治学大綱ほか8点の文献を機械的に列挙した後、次のような説明を加えているところなどがそれである。

「本講義ハ原書ヲ読ム代リニ仮リニ講義体ニシタルノミニテ、余ノ創案ニナルモノ少シ」。

(経済学部図書室)

## 新館紹介

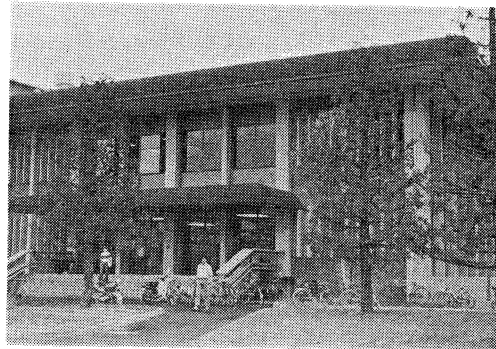
教養部図書館 法学部図書室 経済学部図書室

## 教養部図書館

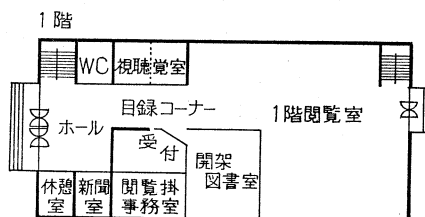
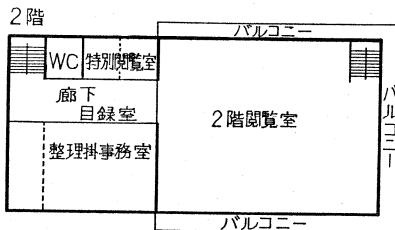
三高時代から多くの図書館利用者に親しまれてきた教養部図書室は、何万人もの卒業生たちの青年時代の思い出を残したまま壊されて、新しく教養部図書館として建てられ、5月7日に開館されました。

場所は、旧図書室の東、教養部キャンパスのほぼ中央（A号館とD号館の間）で、どの教室からもあまり遠くない位置にあります。

図書館は写真のように、2階建てで、まわりの四角ばった建物と違って明るく、何か親しみのもてる感じで気軽にはいれる雰囲気をもっています。



平面図



玄関をはいると、1階は図のような配置になっており、新聞室には当日の朝刊が6種類おいてあります。

教養課程学生が図書を利用する場合、まず図書館に登録しなければなりません。この手続きは学生票と印鑑をもってカウンターへいけば、図書帯出券を発行してくれます。教養部以外の利用者（学内者）には、所属する各学部の図書室で発行している「京都大学図書相互利用書」をもっていけば利用できます。

カード箱とカウンターの間をいくと閲覧室があります。座席数は200席で、2階の閲覧室とあわせると500席になります。視聴覚室などもあり、旧図書室（184席）のような窮屈な状態

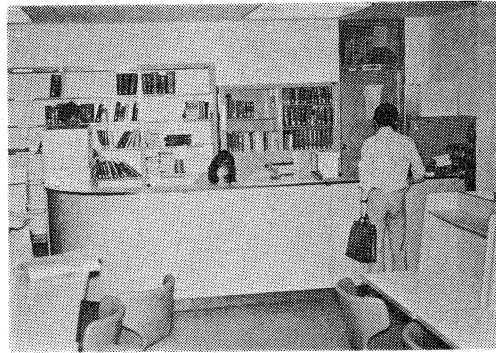
はなくなり、のびのび勉強できるようになっています。また、2階閲覧室周囲のバルコニーからのながめもよく、近くは吉田山、遠くは比叡山を望むことができ、勉強の疲れをいやすことができます。

## 法 学 部 図 書 室

法・経両学部は、昨年4月、永年の念願がかない、ようやく新しい研究・図書館棟をもつにいたった。

「法科大学」以来、歴史を誇り、多くの優れた研究者を生み育ててきた由緒ある赤レンガの2階建てから、鉄筋コンクリートの5階建てへと建てかえられた。

まず、新・旧両建物を比較すると、数字的には下記のようになる。



	(旧)	(新)
閱 覧 室：	な し	357m <sup>2</sup>
閱 覧 座 席：	な し	92 席
書 庫：	684m <sup>2</sup>	2,280m <sup>2</sup>
複 写 室：	な し	56m <sup>2</sup>
事務スペース：	約150m <sup>2</sup>	381m <sup>2</sup>
エレベーター：	な し	2 機（書庫・研究棟・各1）

（注）書庫は両学部で8層、将来は地下を2層にして9層にする予定。

新館ができて特筆すべきことは、赤レンガ時代、法学部は「閲覧室」をもっていなかったが、新たに閲覧室が設けられたこと、書庫が数カ所に分かれていたのが1カ所になったことであろう。

内容的には、経済学部といっしょの建物で、「社会科学系図書館」として建てられたことである。これが計画された時の構想は、部局の枠をこえた「社会科学」という主題をもった図書館が描かれていたのである。しかし実際には種々の問題で法・経別々の運営がなされていて「社会科学系図書館」としての機能は発揮されていない。現在少しでも進行していることといえば、両学部で重複して購入している雑誌、新聞縮刷版の調整、出版物の交換先の請整等のことである。

資料数でみると、両学部で約65～66万冊の蔵書（法：約37万、経：約28万）をもっている。この量は中規模の大学全体の蔵書冊数に匹敵するくらいである。内容的に法学部の蔵書

構成をざっとみたところでは、単に法学・政治学のみならず、哲学・歴史・心理学などの隣接領域の諸学問を含んでいる。このことは経済学部においても同様であろう。以上のことから推し測るに、両学部で社会科学関係の資料はほとんど揃っているといっても過言ではないだろう。

新館を機に新たに学生の閲覧等を加えて、今までの研究者中心の図書室から、法学・政治学を学び研究する人たちのための「法学部図書館」へと動きだしたかにみえる。また、「閲覧・貸出し規程」の改正作業が現在行なわれている。そこでは法学部が今までかかえていた問題点が深き彫りにされ、「案」に対して図書館、大学院、学部学生の意見を聴き、少しでもよいものをつくるよう努力されている。

## 経済学部図書室

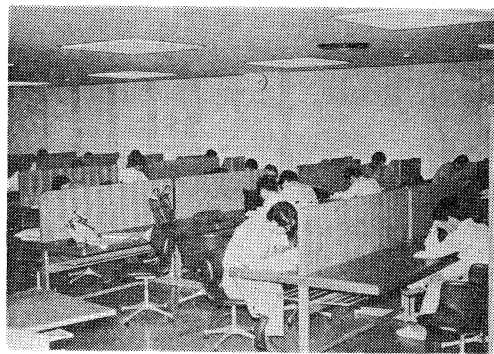
昨年春に完成した法・経両学部の研究・図書館棟の1階にある経済学部閲覧室は、その内部を大きくわけるとカード目録を中心に、図書コーナー、雑誌コーナー、閲覧席にわかれており合計約70の座席がある。

図書コーナーには和・洋の新着図書をはじめ、教官の指定による指定図書、文献探索のために必要な辞書類および二次資料等、約4,000冊が開架されている。また雑誌コーナーには国内雑誌約200種、外国雑誌約300種の各最近1年分が自由に閲覧できるように排架されている。

一方、書庫には約28万の蔵書があり、その内容を見ると経済学、社会学関係はもちろん、近接学問としての地方誌の集書の多いことは文学部につぐものであり、その他哲学・政治・法律・教育等の広い分野にまで及んでいる。

昨年10月16日新閲覧室開室以来利用者数は日に日に増加し、最近では時間によっては閲覧席は満席の盛況であり、閲覧・貸出を通じ利用者の所属を見てみると、経済学部3に対して他学部1という割合がでており、いかに経済学部の図書室が広く利用されているかがわかるのである。

なお図書室の運営、購入に対する図書の選択等については、教官・大学院生・学生・図書掛によって構成されている図書委員会において検討し審議される等、より良い図書室をつくり上げるための活動がなされている。



## —特集— 閲覧室の現状と問題点（その6）

### 文学部閲覧室

文学部は明治39年に開設された文科大学の後身であり、まず哲学科が開講された。翌40年9月史学科さらにその翌41年9月には文学科が開講され、45年5月までに現在の研究体制が整った。現在、文学部には哲学科閲覧室・文学科閲覧室・史学科閲覧室（以下哲閲・文閲・史閲と略す）の3カ所の閲覧室に分かれている。哲閲と文閲は本館2階（昭和11年完成）に、史閲は東館2階（昭和39年・40年度に完成）の位置にある。史閲は東館が完成するまで、文学部附属施設の陳列館にあったもので史学科研究室とともに移転したものである。各閲覧室とも、それぞれの学科に所属する図書を収蔵し、併せて約53万冊（47度末）の図書を保有して、現在教官80名、院生415名、学部学生（研修員を含む）668名、事務系職員63名を対象に活動を行なっている。

各閲覧室の座席数は哲閲32席、文閲32席、史閲24席の合計88席となっている。教官・学生を併せた1,153名に対する席数比は7.6%と低いが、教官・院生は研究室で個人席が保障されているとみて、学部学生だけの席数比は13%程度となるから、今までにレポートした他の学部図書室にくらべて低い。

閲覧室には、参考図書も配架され、隣合せの書庫は部内者に開放されるなどの配慮がなされているが、面積も狭いため、哲閲を除いては、閲覧室と閲覧事務室（2名ずつ配置）とは同居している。それに南向きの閲覧室はなく、日当りは不十分である。また、哲閲と文閲にはスチームとコールドヒーターが設備されているので暖かい方であるが、冷房設備はないので、夏は暑く、まだまだ快適な閲覧室とはほど遠い感じがする。史閲も同様でスチームがなく、ガスストーブだけなので底冷えがひどい。

哲閲・文閲は同じ建物の同じ階層にあるが、史閲は別棟にある。図書館員にとってこのような配置は管理上、大変であろう。学科別配置は、文学部だけでなく、理学部、工学部などの自然科学系の部局では珍しくないが、学部図書室が3学科に分かれている閲覧室および書庫を管理しなければならないところは、学内では文学部以外には見当たらない。また、文学部は38講座（48年度）で構成されているが、同一系統の講座などは集って「教室」と呼ばれて28教室となり、それぞれの教室が独自の図書分類表をもっている。そのため各閲覧室の書庫には、所属する教室の図書が教室別に、いいかえればそれぞれの分類別に配架されていることになり、利用者（とくに学生）も図書館員も大変なことであろう。（これを解消するため、文学部の統一分類表にNDCを採用して昭和26年ごろから分類目録を編成している。）そのうえ、哲閲・文閲の書庫はすでに一杯で、さらに雨もりがするなど、閲覧室の整備とともに大きな悩みである。この特集の始めにとり上げた教養部図書室の雨もりは、本年5月に「教養部図書館」が新築され面目を一新したため、学内の図書室のなかで最も多くの問題をかかえたところといえるかもしれない。

文学部が建て替えられるのがいつの日かわからないが、閲覧室を中心に、利用者はもちろん、図書館員の管理の面からも、利用しやすい図書館が計画されることを期待したい。

（文責・武内）